日本緑化工学会の発足にあたって

会長 新田伸三

日本緑化工研究会は，平成元年5月から日本緑化工学会と改称し，学会として発足することになりました。

昭和30年代後半に始まるわが国経済の高度成長に伴い，国土の開発が各地で大規模に行なわれ，土木工事によるのり面の造成が目立つようになりました。わが国のように地形が急峻で，年間降雨量の多いところでは，のり面を放置すると，雨水による侵食が著しいことは改めて指摘するまでもありません。これに対して従来は，張芝や筋芝によってのり面を保護してきましたが，芝材料の不足に対処して，経済的で急速緑化の可能な播種による機械化施工が一般的となりました。また芝に代る各種の緑化資材が続々と考案され，わが国の緑化工は急速に発展し，その技術は諸外国に比べて決して引けを取らない水準になったと言えましょう。このことは大変喜ばしいことではありますが，こうなるまでに，特に初期の頃はまだまだ失敗も多く，試行錯誤の繰返しでした。そこでこれらの問題点を話合うため，植生によるのり面保護に携わる研究者が中心になって，昭和41年1月に日本法面緑化研究会ができました。

この研究会は，当初は少人数のサロン的な集まりでありましたが，その後会員も増えてきましたので，緑化工に関する研究を一層促進し，技術の向上普及を図るため，昭和47年3月にこの研究会を改組し，日本緑化工研究会と称することになりました。この新しい研究会での主な事業として，緑化工技術検討会が毎年1回開催されてきましたが，近年は全国から200名をこえる参加者を見るようになりました。また昭和48年3月以降，機関誌として「緑化工技術」を発行し，昭和63年度に第14巻が出ています。このようにして昭和63年度現在で会員数は400名をこえ，緑化工の中心的研究団体として成長するに至りました。このような研究上の実績が認められ，昭和59年11月には日本学術会議に学術研究団体として登録することができたのであります。しかし全会員のうちに占める研究者の比率は，残念ながら漸増してはいますが，特に多いということはできません。これは緑化工が他の多くの既成の学問を基にして，応用技術として発達してきた年数が浅いため，緑化工専門の研究者が育っていないということで，今後は特に若い研究者を育成することが何よりも急務であります。そのためには，われわれの研究集団が若い研究者にとって魅力があり，研究成果を発表する場としても権威があるという事実が示されねばなりません。

今まで「緑化工技術」誌は，緑化工に関する唯一の研究情報誌として，関係者の間で高い評価を得て来ましたが，今回学会に改組することにより，学術論文については他の学会同様に厳密な査読を行ない，学術的に正当な評価が得られるようにしたいと考えています。こうすれば研究者の業績として十分認められるものとなるわけです。やがてわれわれの緑化工学会誌にも優れた学術論文の積極的な投稿が十分期待できると考えています。

もちろん学会誌といっても難しい論文ばかり掲載されるわけではありません。広い視野に立った総説，分かり易い技術解説，現場からの調査報告や緑化事例の紹介など，一般の技術者にとって興味があり，活用しうる記事も大切にしたいと思います。

ところで緑化に関する研究分野は，のり面緑化から，都市，国土，グローバルな砂漠の緑化まで広い範囲にまたがっています。また内容的には優れた自然の代表としての緑の保全，緑化による生活環境の保全や景観の保全といった人々の生活と深くかかわる問題が，現在大きくクローズアップされています。このように研究の領域が拡大してくると，もはや個人的な研究よりも，多くの分野の専門家が集まってグループ研究を行なう必要性が高まってきます。そこで今度の緑化工学会ではその組織として，ルーチンワークとしての事業部門の外に研究部門を設けて，社会の多様なニーズに対応した研究成果を挙げるために，各種の研究部会を常置することにしました。この体制はいささかユニークな試みであると言えましょう。さし当り斜面緑化研究部会，都市緑化技術研究部会，環境林研究部会，生態系保全研究部会，乾燥地緑化研究部会を置くことにしていますが，このような研究部会での活動を推進することによって，おのずから社会に対する学会の役割が明らかとなり，緑化業界の発展にも役立つものと考えています。もちろんこのような研究部会は，決して固定的なものではなく，社会のニーズに応じて順次改変していくべきものであることは言うまでもありま

せん。なおこれらの部会は学会員に開放されており，だれでも参加ができます。そこではメンバーの一員として積極的に研究に参加することが期待されています。なお学会活動は従来は東京中心的なきらいがありましたが，今後は地方での活動を促進するため，まず関西支部を置くことにしました。

緑に対する関心の深まっている現今の社会情勢下にあって，本学会の発足は早速各方面から注目を浴びています。日本緑化工学会としては今後増大するであろう緑化に対する社会の期待に答え，生活環境に潤いをもたせ，美しい国土を造成し，急速に悪化しつつある地球環境を改善するため，緑の再生や創生に役立つ積極的な緑化研究に力点を置きたいと考えています。この方面に関心をもつ他の分野の研究者も，ぜひ参加協力されることを期待しています。

最後に，従来旧研究会時代には，官界，業界挙げてご支援をいただいてきましたが，今回学会として発足しても，その分野が実社会に結びついた研究であることから考えて，いわゆる学術的研究活動に終始することなく，広く各界の発展に役立つような技術の向上と普及にも貢献していきたいと考えていますので，今まで以上に官界や業界の強力なバックアップを切望するものであります。何はともあれこの機会に更に多くの方々に入会して頂けるならば，学会の活性化に大いに役立つと思われます。

（名城大学農学部）

斜面緑化部会の研究活動

小　橋　澄　治

（斜面緑化研究部会）

日本の緑化工技術は斜面緑化工技術を中心として発達してきたといっても良いだろう。それは山地の多いわが国で，開発を進めようとすると山地を切開くことが避けられず，それだけニーズが多かったためである。

今後，山地の開発行為が減少していくとは考えられず，また“緑”への志向はさらに高まるであろうし，斜面緑化工は緑化工全体の中で大きい地位を占め続けることは予想できる。

わが国において，裸地斜面を緑化しようとする技術は古い歴史を持つ。しかしそれが急激な発展を見せたのは昭和30年代後半からであり，わが国の経済的高度成長開始時期と一致する。それ以降，社会資本への投資規模拡大，開発行為の大規模化，土木工事の機械化と歩調を合せて新しい技術が次々に開発され，わが国の斜面緑化技術は世界的にみても極めて高い水準に達している。例えば近年開発された厚層吹付工をもってすれば，急勾配のコンクリート面でも石垣でも緑化は可能であり，人間が近付き難い山地でもヘリコプター緑化工で施工することができる。

技術発展の方向は社会のニーズによって決定されるものであり，斜面緑化工も例外ではない。昭和30年代の緑化工の機械化，製品化の方向は当時の土木工事の機械化，大規模化，高速化にマッチする発展を緑化工に求められた結果であり，昭和40年代後半から顕著になった開発行為に対する環境，景観保全の立場からの批判に対応して，岩盤緑化工法の発展があったといえる。

今後の斜面緑化工の発展の方向も当然今後の社会のニーズがいかなる方向に向うかによって，決定されるに違いない。技術開発には時間を要するものであり，出来るだけ早期に将来の社会的要請を予測し，技術開発の方向を決定すべきであろう。

わが国の社会，経済的な変動は急激であり，近い将来のニーズを予測することすら難しいが，現在の斜面緑化工の状況にとらわれない大胆な発想で研究開発の方向を探るべきだろう。

以上の問題意識を持って，斜面緑化研究部会が当面取組むべき問題は以下の通りと考える。

1.　斜面の安定に及ぼす植生の影響解明と安定度補強を考えた緑化工法の確立

“緑化と斜面の安定性”という問題は，その難しさ，複雑さからみて，斜面緑化工の関係者にとって“永遠の課題”ともいえる。しかし環境，景観保全の見地から“斜面を出来るだけ緑で維持したい”という風潮は今後